

呼吸器外科

診 療

呼吸器外科は、呼吸器（肺、縦隔、胸膜、胸壁）の外科的疾患を扱っており、20年度の総手術件数は118件、そのうち全麻手術件数は82件でした。

肺がんの手術件数は64件で、前年度と比較し13例の増加でした。最近の肺がんの特徴として画像診断の進歩に伴い、すりガラス陰影を呈する早期がんが増加し、昨年度の肺がん手術例の1割強が野口分類のAあるいはB型に相当しました。こういった症例は術前の診断が困難なため、術中迅速病理診断を活用しています。このような症例では縮小手術が可能であり、肺内や肺門リンパ節の術中病理診断で、転移がなければ区域切除に止めるケースが増加しています。また女性の肺がん手術例が徐々に増加しており、昨年度は肺がん手術症例の45%を占め、15年前の2倍の割合でありました。転移性肺腫瘍は8例で結腸・直腸がん、乳がんと軟部腫瘍の転移でありました。術後重篤な合併症はなく、1999年を最後に術死および術後在院死はみられず、肺がん肺葉切除術および肺摘除術での術死は0.6%であります。

術後の補助化学療法として本邦におけるエビデンスのあるデータは病期I B期のUFTしかないため、II期以上の症例や再発例に対し、インフォームドコンセントを十分行い、希望があればカルボプラチン、タキサン系抗がん剤、ナベルピンやジェムシタピンを組み合わせ積極的に化学療法を行いデータを蓄積しています。5年生存率は病理病期I A期82%、I B期69%、II A期67%、II B期43%、III A期35%、III B期32%、IV期10%でありました。

自然気胸は11例ありますが、低侵襲にて術後の痛みが少なく、早期退院ができる内視鏡（胸腔鏡）手術を行っています。手術適応については、再発、気瘻が遷延している場合としています。

抱 負

肺がんが術後再発した場合には抗がん剤治療を行います。有効性には個体間に差が見られます。分子標的治療薬の使用に際しては、遺伝子異常の検索や免疫染色を取り入れ、効果が期待できる対象を選択し、予後改善に努めております。喫煙率は徐々に減少しておりますが、若い女性の喫煙者はむしろ増加しております。女性の肺癌の増加は戦後の急速なタバコ消費に伴った副流煙が原因と思われ、肺癌予防のために禁煙外来や禁煙に関する講演会を行っております。





